

# お 暑 い の が お 好 き

\* 文中敬称を省略します。

都市研究センター 研究理事  
渡 辺 直 行

## はじめに

超高層ビルを建て並べる式の土地利用で異常高温がもたらされているとするならば、われわれは高温多湿の風土とは何かを改めて考えてみなければならない。このまま温度が上昇していけばやがて人は住めなくなる。

ところが、実に驚くべきことに、そのような都心に最近では人口が回帰しているという。「お暑いのが好き(Some Like It Hot)」な人が増えているのかと皮肉を言っていた人もいたが、暑さの実態を知らないということもあるのではなからうか。

もっとも一口に都心と言っても少し広いので、回帰している土地が高温域であるとは限らない。そこで本稿では人口がどのあたりで増加しているのかを見ておきたい。あわせて高温域の風景も少し眺めてみたい。

## 1. 人口の都心回帰

図 - 1(1)は住民基本台帳調査により、平成 16 年から平成 17 年にかけての人口増加率が 10% 以上の町丁を示したものである。都心 3 区(千代田区、中央区、港区)に人口増が集中していることがわかる。区部の北部、西部、南西部等においても河川沿いのところなどで人口が大きく増えているところがあるが、人口急増町丁の多くは都心にある。

図 - 1(2)はその都心部を拡大したものである。どうやら高温域で人口が増加しているらしい。別稿「ハードボイルド・ワンダーシテ

ィ」の図 - 7(2)と重ねて見ると、都心の人口急増町丁はおおむね高温域の中にある。すると、この人口増が 2004(平成 16)年の高温域をさらに暑くしている可能性が高い。

しかしまたよく見ると、人口急増町丁は高温域の端の方に位置しているものが多い。高温域を外から取り囲むように位置している。これらの町丁で最近多く建っているのはタワーマンションの類である。すると、それらの建物が東京湾からの風を遮って都心の高温域をさらに暑くしているということも考えられる。このような立地を踏まえて考えると、最近都心に回帰している人々は暑さを好む人であるとは必ずしも言えない。むしろ冷房完備の快適な生活を送っている可能性が高い。そしてその排熱がますます都心を暑くしているかもしれない。また、建物が内に閉じた形だと街としてのコミュニティ形成にも影響があるかもしれない。自然再生、社会再生を都市再生の中心課題と見る観点からすると、都心の望ましい住居形態というものも改めて考える必要がある。

## 2. 高温域の風景

以下では都心の高温域の風景を 3 地区に分けて眺めてみたい。それぞれの地区について掲げる図の上のものは別稿「ハードボイルド・ワンダーシティ」の図 - 7(2)を部分拡大したものであり、下の図はその地区の地図(国土地理院地形図)である。

図 - 1(1) 10%以上人口が増えている町丁(平成 17 年 / 16 年)

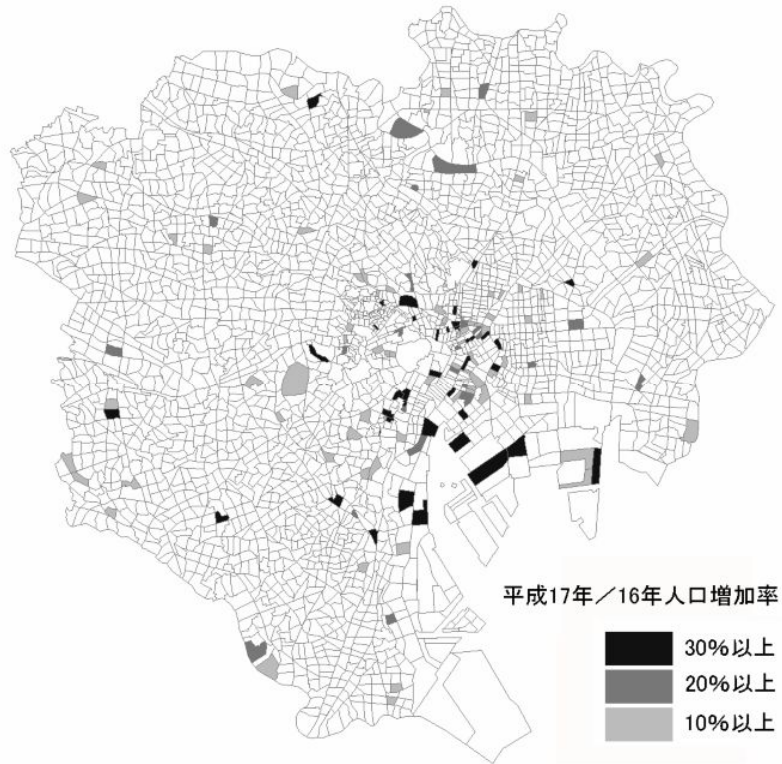


図 - 1(2) 同都心拡大図



(資料) 住民基本台帳調査(各年1月1日現在)

## (1) 新橋・外堀通り

図 - 2 は中央区西部から港区東部にかけての地表面温度分布を見たものである。特に温度が高い地区が2箇所ある。

1箇所は図右下の晴海の埋立地である。その中では特に5丁目の北東部が高温になっているが、ここには中央清掃工場がある。またその東側には「ホットプラザはるみ」という中央区の施設があるが、それもホットなのかもしれない。なお、晴海5丁目には超高層マンション群が建設される計画があり、これからますます暑くなっていく可能性がある。

もう一箇所の高温域は、図の左端を縦に貫いている地区である。これは日比谷通りと中央通りとに左右から挟まれた地区である。その中で特に温度が高いのが新橋から西新橋にかけての外堀通り沿いの地区(銀座線新橋駅～虎ノ門駅の区間)である。ここには民間のオフィスが集中しており、また、飲み屋も多いので、その両者が複合して人が集まって温度が高くなっているものと思われる。

この地区の昼間人口密度は別稿「かがやける都市」の図 - 5 に見るように極めて高い(新橋1丁目 1,421人/ha、新橋2丁目 1,090人/ha、西新橋1丁目 1,645人/ha)。この地区の東側には汐留の巨大ビル群がある。この地区と東京湾との間にそのビル群が建っているわけである(図 - 3 参照)。

## (2) 有楽町～八重洲・外堀通り

図 - 4 は中央区中部の地表面温度分布を見たものである。西側の外堀通りと東側の昭和通りとに挟まれた地区(JRの線路と首都高速都心環状線に挟まれた地区)の温度が高くなっているが、また、外堀通りの西側で

は丸の内3丁目付近や東京駅丸の内側の温度が特に高くなっている。

丸の内では再開発で超高層ビルが増えてきているので、それが高温の主な原因であるかもしれない(昼間人口密度は丸の内1丁目が840人/ha、丸の内2丁目が1,883人/haと極めて高い)。そこではこれからも超高層ビルが建設される予定になっているので、温度はますます上がっていく可能性がある。丸の内3丁目(昼間人口密度1,153人/ha)では東京フォーラムのある位置が特に高温になっている。外堀通りの東側では京橋1丁目付近が特に高温になっているが、このあたりは八重洲～日本橋のオフィス街の真ん中になり、昼間人口密度もきわめて高く(京橋1丁目は1,620人/ha)、熱が滞留しているものと思われる。

図 - 5 は丸の内から銀座、築地方向を見たものであるが(右下が東京フォーラム)、この方向には湾岸に高層ビルはあるが超高層ビルはなく、そのためやや温度が低い地区が少し陸地内部にまで存在しているが(図 - 4 の下端中央部)、それも築地から銀座に入るあたりで止まっている。

図 - 6 は丸の内から八重洲方向を見たものである。ちょうど正面真ん中あたりが京橋1丁目付近になる。その向こうに見えるのは左側が大川端の超高層マンション群であり、右側が佃島等の超高層マンション、超高層ビルである。この位置で見ると、埋立地の超高層建築群が意外な近さで都心に迫っているのがわかる。

図 - 2 中央区西部～港区東部の地表面温度分布

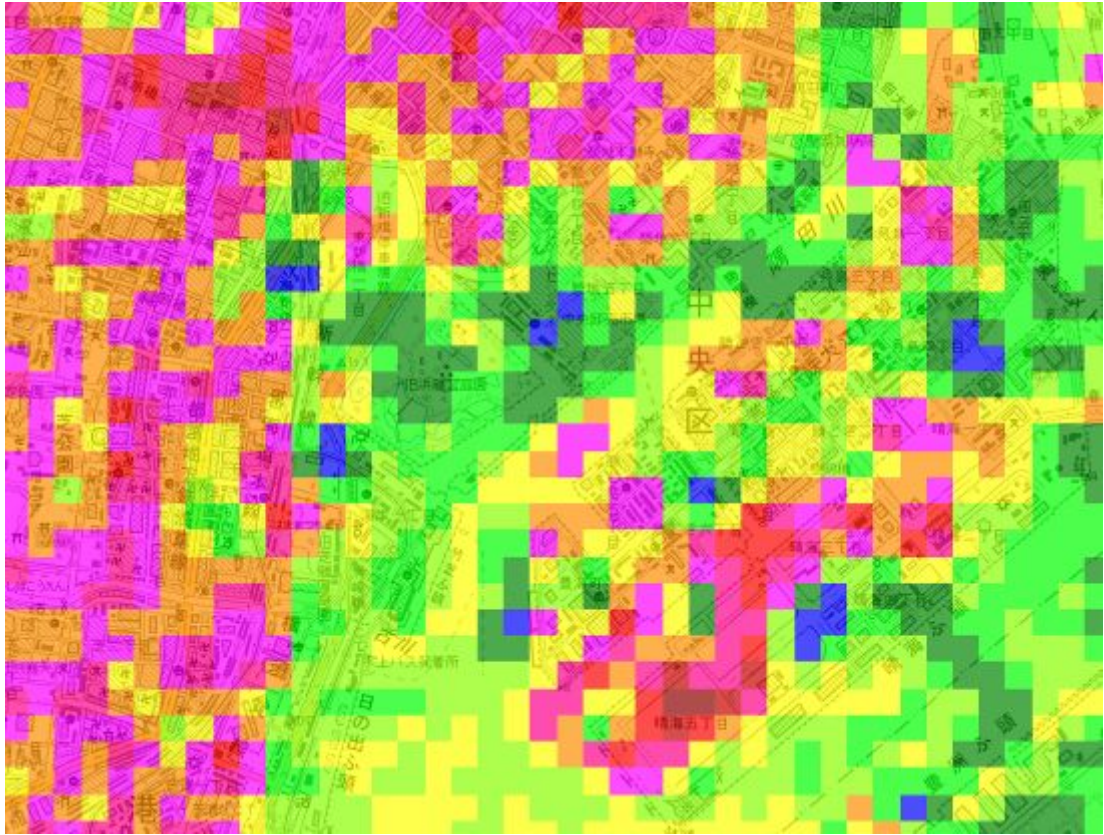


図 - 4 中央区中部の地表面温度分布

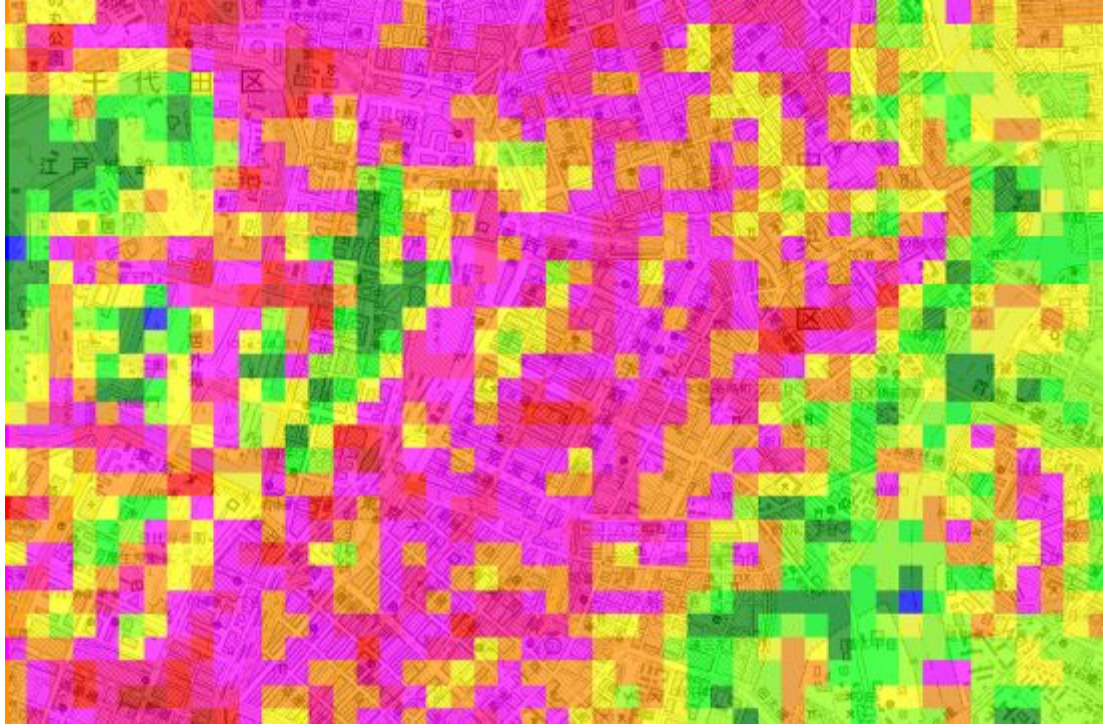


図 - 3 虎ノ門から新橋方向を見る  
(左側の道路が外堀通り、正面が汐留)



図 - 5 丸の内から有楽町方向を見る



図 - 6 丸の内から八重洲方向を見る



### (3) 神田・靖国通り

図 - 7 は千代田区北部の地表面温度分布を見たものである。高熱域は図の右端中央にある岩本町から靖国通り沿いに西進して九段下交差点に達し、そこからは目白通りに沿って北上して飯田橋交差点に至っている。靖国通り沿いには特に高温の地区が連なっており、その南の内堀通り沿いにも高温域が存在している。また、九段下交差点付近や飯田橋交差点付近も特に高温になっている。

この付近は昼間人口密度が極めて高い町丁が連なっている。図 - 7 で特に高温の地区付近の町丁(カッコ内は昼間人口密度)を靖国通りに沿って東から例示すると、神田須田町 1 丁目(1,106 人 / ha)、神田鍛冶町 3 丁目(1,382 人 / ha)、神田司町 2 丁目(874 人 / ha)、神田小川町 3 丁目(988 人 / ha)、神田神保町 2 丁目(854 人 / ha)、九段北 1 丁目(1,223 人 / ha)等となっている。

図 - 8 は靖国通りの神田小川町近辺(図 - 7 の東半分にあたる範囲)を北から眺めたものである。手前を左右に走っている通り(ビルの陰で見えない)が靖国通りである。後方は大手町、丸の内の超高層ビル群である。

図 - 9 は靖国通りの神田神保町近辺(図 - 7 の西半分にあたる範囲)を北東から眺めたものである。手前左下から右上に走っている通り(これもビルの陰)が靖国通りである。後方には赤坂、六本木方面の超高層ビルが見える。

図 - 10 は目白通り周辺を西から眺めたものである(右方が九段下、左方が飯田橋)。目白通りの周りにも高い建物が建ちつつある。

図 - 11 は飯田橋交差点を東から眺めたも

のである。交差点は超高層ビルに囲まれつつある。

### おわりに

都心東部の真ん中を走る幹線道路の周囲が特に暑くなっているということは、都市問題を考える際によく認識されなければならない。外堀通り、中央通り、靖国通り、目白通り・・・、このあたりが現下の中心市街地問題のホット・イシューであるかもしれない。

ところで、「お暑いのがお好き」のように人が集まる都市はとんでもない都市だと言っていた人がいたが、そう決め付けたものでもない。ビリー・ワイルダー監督の「お熱いのがお好き」(1959 年)はとんでもない映画のようでもあるが、ラストのセリフ「完全な人はいない」の一言で素晴らしい映画になっている。この一言はこれからの都市社会をつくる上での要の言葉でもあるから、都市がそれで素晴らしいものになる可能性はおおいにある。

図 - 7 千代田区北部の地表面温度分布

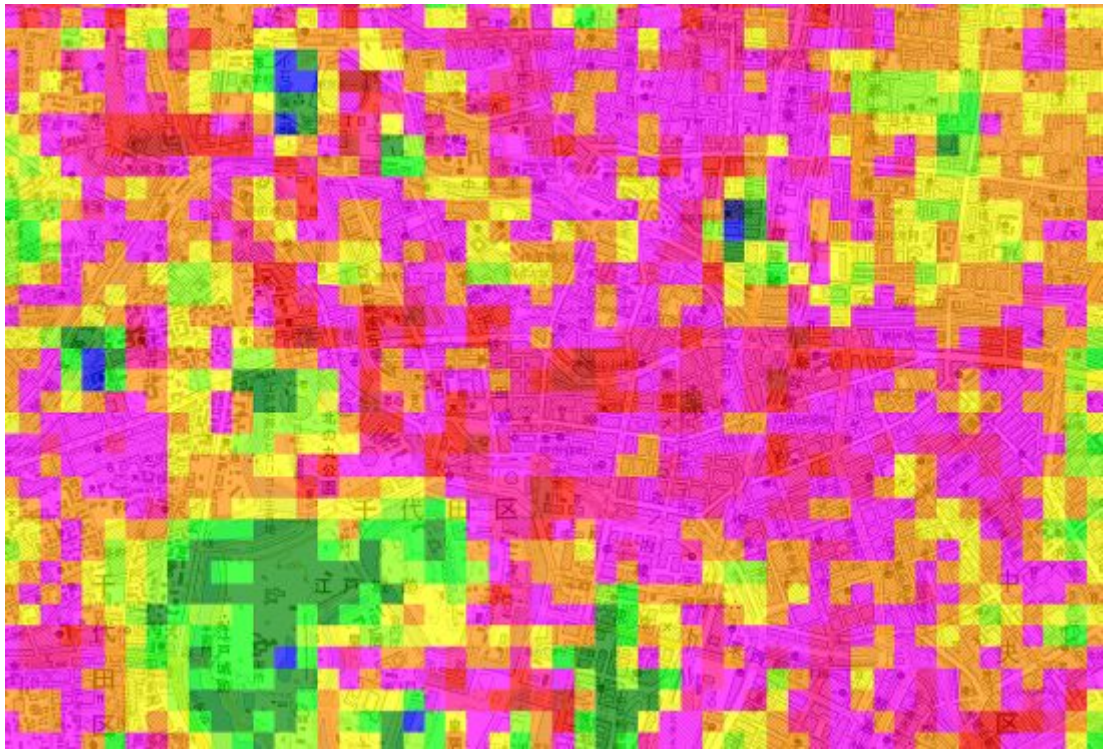




图 - 8 靖国通り周辺(神田小川町付近)



图 - 10 目白通り周辺(飯田橋～九段下)



图 - 9 靖国通り周辺(神田神保町付近)



图 - 11 飯田橋交差点付近

